

Peshawar-kai

ペシヤワール会報

ペシヤワール会事務局
〒810-0003 福岡市中央区春吉
1-16-8 VEGA 天神南601号
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

号 外

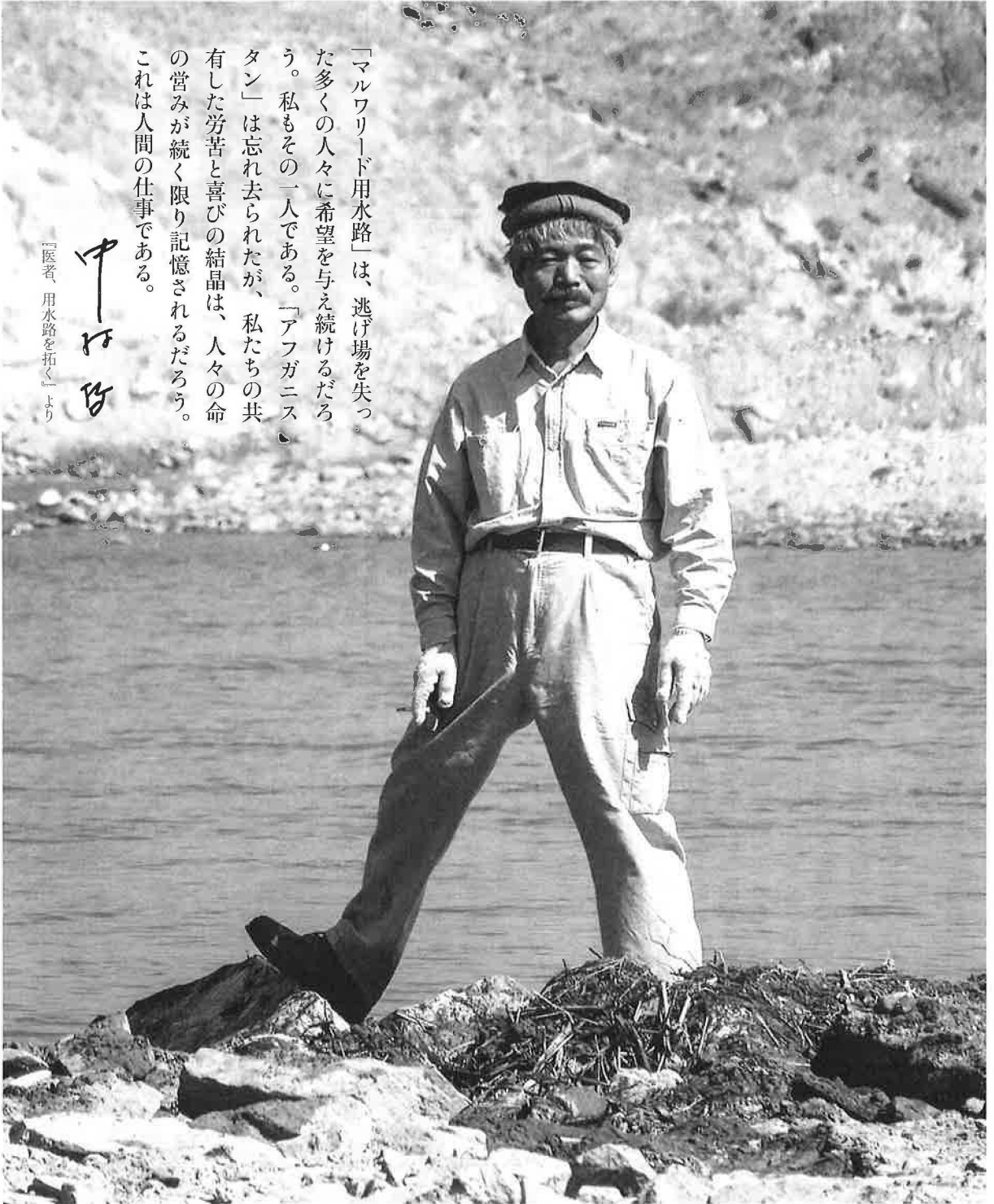
2019年12月25日

<URL> <http://www.peshawar-pms.com> <E-mail> peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

「マルワリード用水路」は、逃げ場を失った多くの人々に希望を与え続けるだろう。私もその一人である。「アフガニスタン」は忘れ去られたが、私たちの共有した労苦と喜びの結晶は、人々の命の営みが続く限り記憶されるだろう。これは人間の仕事である。

中村 啓

「医者 用水路を拓く」より



十二月四日(水)、中村哲医師が、いつものようにジャララバードの宿舍を出て作業現場に向かう途中何者かに銃撃され、病院に移送された後、亡くなりました。享年七三歳。また、同乗していたドライバターのザイヌッラー・モーサム(Zainullah Musam)さんと四人の護衛の方々も殉職されました。中村医師を初め皆様のご冥福を祈るとともに、ここに追悼の意を表し「号外」を発行致します。

中村先生の絶筆となった「信じて生きる山の民」(西日本新聞、十二月二日掲載)を十一・十二頁に転載しております。

先生と犠牲者の御霊に事業の継続を誓います

—中村哲医師告別式での弔辞—

ペシャワール会会長 葬儀委員長 村上 優

告別式の前日、ジア先生たち四名で自宅を弔問しました。中村先生のご家族だけで最後の時を過ごしたいというご意向を尊重していましたが、アフガニスタンより同行して来日したP.M.S.(平和医療団・日本)院長補佐のジア先生、ディダール技師の訪問の許しを得ました。悲しみの中でのお悔やみに始まり、中村先生の事業を引き継ぐこと、そして中村先生の教えは私の心の中ですべて生きているというジア先生を受け入れていただき、ご家族と打ち解けて話が進みました。小さなお孫さんが出てくるとジ

ア先生は抱き上げて、嬉しそうに、また親しげに接しながら、ジャララバードのスタッフハウスで中村先生と同居していた時に孫の話がよく出ていたことなど、和やかに家族思いな中村先生の一面を披露していただきました。その後は中村先生の前で皆さんと何度も写真を撮り、またこれからの協働を約束しました。

告別式には全国から多数の方に参列いただき、ありがとうございます。事業継続を皆様の前で誓うことができました。

追悼の辞

中村哲先生。先生の御霊を前にお話しするなど考えもありませんでした。今の私には、先生の死を受け入れる余裕はありません。いくら力を振り絞っても、押し寄せる悲しみに圧倒されるばかりです。ですがペシャワール会の会員を代表して言葉を述べよと多くの人々が私を後押ししています。中村先生、力をお与えください。

中村先生。先生がヒンズークシュ山脈のティリチミールに登頂された翌年の一九七九年、トレッキングに誘っていただきましたね。足を延ばしてカイバル峠を越えてヘラートまで、さらにバーミアンまでと計画していました。しかし旧ソ連軍によるアフガン侵攻で国境が閉鎖されたと聞いて、ヒンズークシュ山脈の麓のギルギットに赴きました。山の中で満天の星を見ながら、命について語り明かしたのが長い交誼の始まりでした。そのとき先生は、命の平等について強い口調で語られました。山岳部にすむ貧しい人たちが簡単な病気で亡くなっていくのを見て、手を差し伸べないことの不条理さを語っておられました。

その後先生は、一九八四年五月にペシャワール・ミッション病院に赴任されました。パキスタン北西辺境州でのハンセン病根絶



アフガン難民キャンプで診療を行う中村医師 (1980年代)

計画を担うためです。ペシャワール会は、先生の医療活動を支えるために、その前年に七〇〇名の仲間が集い発足しました。それから三十六年の月日が経ちます。中村先生。幾多の困難がありましたね。当時のペシャワールには三〇〇万人を超える難民が押し寄せていました。先生は、その苦難について私たちに語ることは少なく、人の命の不平等や世の中の不条理なことについては、心の中に押し込めて、いつも前を向いて淡々と歩きました。

ミッション病院を出て一九八六年には、JAMS (Japan-Afghan Medical Services)

を創られ、それを核にPMS基地病院を創られました。その前には、アフガン東部の誰も手を差し伸べたことのない山岳最深部のドラエヌール、ドラエピーチ、ワマに診療所を作られました。

二〇〇一年の9・11事件後の米軍によるアフガン空爆の時には、飢えや寒さで餓死寸前の二〇万人以上の人々に小麦粉や食料油も届け、首都のカブールに臨時診療所を五カ所作られました。

そういう戦乱がつづく中で、二〇〇〇年からは、追い討ちをかけるように大干ばつがおこりました。中村先生が井戸を掘ると言い出された時も戸惑いましたが、農業用水路を造ると言われた時には、そんなことができるのかと不安がつのりました。先生は、それが人々の命を助けるために必要だからという理由を挙げられましたね。人を理解する深い洞察力を源泉として、分かりやすい言葉でいつも語られました。そしてそれを黙々と実践してゆかれ、井戸を掘り、用水路や堰せきを造り、一六、五〇〇ヘクタールの大地を緑に甦よみがえらせました。

でも先生は、そんな大きな仕事を成し遂げながら、おっしゃることは、とても平易なことでした。人の幸せとは、「三度のご飯が食べられて、家族がいっしょに穏やかに暮らせることだ」と。

中村先生。先生が筑後川の山田堰から学



ドラエピーチ診療所の式典にて祈りを捧げる中村医師と職員達 (2003年5月27日)

んだ取水堰の伝統工法は、PMS方式という名で、アフガニスタンに根付き、将来的にはアフガニスタン全土に拡がろうとしています。先生に「名誉市民証」を授与されたアフガニスタン・イスラム共和国のガニ大統領は、PMS方式こそ、農業国アフガニスタン復興の「鍵」だとおっしゃいました。日本では、何度も皇居に招かれて当時の天皇陛下や皇后陛下に活動報告をされ、「思わぬところに理解者がおられた」と語られていましたね。

中村先生は良心を生きてこられました。いつか「アフガンにはよい人も、悪い人もい



誠実な人柄を見込まれ、中村医師のドライバーを務めたザイヌッラーさん(左)。中村医師を父親のように慕っていた(2019年4月27日)

る、が、それを含めて共に生きている」と話されました。先生は、この三五年間、アフガニスタンや日本の膨大な人々のこのころの支えとして、実のある事業を完成させて来られました。そういう中で凶弾に倒られ、尊い犠牲者になられました。

中村先生だけでなくザイヌッラーさんも死去されました。中村先生付きのドライバーで、行動をいつも共にしていましたから、現場では右腕のような存在でした。警備の方々も亡くなられて大きな悲しみに包まれています。逝去されたすべての方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。

先生は、誰も彼も分け隔てなく、丸腰で歩きました。これも天の思し召しなのでしようか。先生の尊い犠牲は私たちに前を向いて進めど力をこめて後押しをしています。

言葉失って悲しみや喪失感などを超えて、押しよせる記憶があります。先生が書かれたこと、話されたこと、言葉を交わしたこと、そしてペシャワールやアフガニスタンで共に体験したこと、その昔ヒンズークシュ山脈の麓を旅したことが脳裡を駆け巡ります。支援していただいた皆様もそれぞれの「中村哲医師」との想いを共にしていただけると思います。中村先生を介してペシャワール会としてつながった人の輪があり、会員や支援者の皆様がおられます。私たちは先生の御霊に誓います。

第一に、ペシャワール会は中村哲先生の意志を守り事業継続に全力を挙げます。遺志ではなく、今も私たちのこのころの中で生きておられる中村哲先生の意志として。

第二に、これまで中村哲先生がいつもされてきたように、遠い先を見つつ、決して後ろを向かず前を向いて歩みます。様々な困難を超えてこられた中村先生は、今でも私のこのころの中で語りかけてくださいます。その声と語り合いながら、会員や支援者の皆様と共に、アフガニスタンの人々、平和を望む世界の人々と事業の支援を続けます。これから中村先生が目のおられない



ミラーン堰周辺にて職員集合。前列中央が中村医師(2016年3月31日)

中で、どのようにPMSの事業を維持できるか、不安ではありますが、支援して下さる人々と共に歩んでまいります。

私は四五年前に中村哲という人に出会いました。中村哲という人が人生の横にいたことが、私の、そして多くの人々の人生の最大の幸いだったと思っています。出会いが人を変える、その出会いを選択するかどうかは私たち一人一人の手にあると感じています。

これまでのお導き、ありがとうございます。

二〇一九年十二月十一日

父の教えを胸に生きていきます

—二〇一九年十二月十日・中村哲医師告別式での挨拶—

中村哲医師 長男・喪主 中村 健

父をご支援頂いた皆様へ
この度の父・中村哲の訃報に際し、親族を代表いたしまして、皆様へご挨拶をさせていただきます。皆様へご挨拶をさせていただきます。私は故人の長男で健と申します。

最初に申し上げたいのは、父を守るために亡くなられたアフガニスタンの運転手の方・警備の方々、そして残されたご家族・ご親族の方々への哀悼とお悔やみの想いです。申し訳ない気持ちでいっぱいです。悔やんでも悔やみきれません。父もし今この場にいたらきつとそのように思っているはず。家族を代表し心よりお悔やみを申し上げます。

私たち家族は今回の訃報に大きなショックと深い悲しみに苛まれました。しかし、多くの方々がともに悲しんで下さり、私たち家族へ多くの激励の言葉をかけて下さっています。本当に救われています。

上皇様ご夫妻からのご甲意の賜わりをはじめ、いつもそばで父を支えてともに活動し

て下さり、これからも継続の意向を示してください。これからペシャワール会の皆様、アフガニスタン国での父の活動に賛同しご支援をいただいている大統領をはじめ政府関係の皆様、大変な環境にある作業現場の中で父とともに活動をしていただいているアフガニスタン国の国民の皆様、父の活動にご賛同いただきご支援をいただいている日本の皆様、そして父を遠い異国に迎える行くにあたり、早急にそして最短の移動スケジュールでいけるようにご配慮していただき、宿泊先まで手配していただいた外務省・大使館・政府関係の職員の皆様、どんなに感謝しても足りません。父が今まで、そして命がなくなってもなおアフガニスタンで活動ができるのも偏に皆様のご賛同・ご協力のおかげとしかいえません。

また今回の事件で警察、航空会社、葬儀会社、遺体の搬送に関わる皆様にはいつも私たち家族の気持ち・立場に立っていただいています。そして二四時間、どんな時で

も真摯な対応をしていただいています。私たち家族は、皆様のおかげで不安・悲しみの気持ちから本当に守られています。感謝しています。

生前、父は山、川、植物、昆虫、動物をこの上なく愛する人でした。家ではいつも庭の手入れをしていました。私が子供の頃はよく一緒に山登りに連れて行ってもらいました。最近も、父とはよく一緒に山に登



通水の喜びを皆で噛み締めながら水路を歩く(2004年2月27日)

つていました。遊びに行くときは「できればみんなで行こうよ」、「みんなで行った方が楽しいよ」ということを言っていました。みんなと楽しみたいという考えの人でした。また父がアフガニスタンへ旅立つとき、私と二人きりで話す場面ではいつも「お母さんをよろしく」「家をたのんだ」「まあ何でも一生懸命やったらいいよ」と言っていました。その言葉に、父の家族への気遣い・思いを感じていました。

今、思い返すと、父自身も余裕がない時もきつとあつたはずです。でも、いつも頭のどこかで家族のことを思ってくれている父でした。父の、自分のことよりも人という性格・どんなときも本質をみるという考えから出ていた言葉だったと思います。そ

の言葉どおり背中で見せてくれました。私自身が父から学んだことは、家族はもちろん人の思いを大切にすること、物事において本当に必要なことを見極めること、そして必要なことは一生懸命行うということです。私が二〇歳になる前はいつも怒られていました。「口先だけじゃなくて行動に示せ」と言われていました。「俺は行動しか信じない」と言っていました。父から学んだことは、行動で示したいと思います。この先の人生において、自分がどんなに年を取っても父から学んだことをいつも心に残し、生きていきたいと思えます。

最後に親族を代表致しまして皆々様からの父と私たち家族へのご厚情に深く感謝いたします。

ました。私は、ゆくゆくは医療の行き届かない離島や山村に行くことになるのかなと思っておりましたが、JOCs（日本キリスト教海外医療協力会）と縁があり、英語、ウルドゥー語、ハンセン病、結核、熱帯医学などの専門の研修を終え、パキスタンのペシャール・ミッション病院に赴任することになりました。

その間、七年間程、家族皆で過ごしました。長女が十歳になった頃、私と子供達は日本に帰りましたが、主人は単身で日本と現地を往き来する生活が始まったのです。

それからは皆様もご存知のとおり、活動は医療から水路事業に、場所もパキスタンのペシャールからアフガンのジャラバードと変わりました。あつという間の三五年ですが、事業もだんだん大きくなり、それだけに苦労も多かったと思えますが、沙漠が緑化して六五万人もの人々が暮らせるようになったことは、本当に素晴らしいです。これは、主人ひとりでは決してできなかったことで、それこそペシャール会以来、多くの方々の方々の支えがあつてのことだと思えます。

寄稿 現地の人々と共に活動が続いていきますように

中村哲医師夫人 中村尚子

いつも頭の片隅で案じていたことが、現実となりました。

事務局の福元さんから主人が亡くなった連絡を受けた時は、重たい石が私の胸の奥

にずしーっと落ちていく感じで、返事をするのがやつのことでした。

主人は、結婚してまもない頃、「自分は医療の足りない所で働きたい」と言っており

訃報を受けてから、事務局の城尾副会長、藤田さん、近藤さん達と主人を迎えにカブールまで行ってきました。帰国してからは、検死、司法解剖、そして葬儀を無事に終えることができました。その間、いろんな手

続きや手配で、ペシャワール会事務局の方は勿論、大使館、外務省、県警の方に緻密に対応していただき、大変お世話になりました。深くお礼申し上げます。

今回アフガンを訪れて、私が思っていた以上に主人はアフガンの人々に慕われ感謝

されていたと感じました。主人も、空の上から喜んでいと思います。今後も変わらず日本の支援が続く、現地の人々と共に活動が継続できることを願っています。もちろん、主人もそれを一番に願っていると思います。

ほんとうに、皆様ありがとうございます。

寄稿 父を支えて下さった全ての方に感謝しています

中村哲医師 長女 中村秋子

はじめまして、長女の秋子と申します。今回の事件で皆様にはたいへんご心配とご迷惑をおかけいたしました。心よりお詫び申し上げます。

何よりも父と一緒に亡くなられた五名のスタッフ、ご家族には申し訳ない気持ちでいっぱいです。心よりお悔やみ申し上げます。今回のために尽力して下さったペシャワール会スタッフ、現地スタッフ、会員の皆様、政府関係、警察、協力していただいた皆様、また父のことを偲んで下さる全ての方に感謝いたします。

このような事件が起こってしまったのは残念ですが、あり得ることだとずっと思っ

ておりました。もしかしたら、これが最後かもしれないと思いつながら毎回父を見送ったものです。自分に言い聞かせていたことですが、現実になるとやはり悲しいです。

家ではおおらかで素朴な普通の父親でした。山登りや草木など自然が好きで、時間の許す限り庭仕事をしていました。トネリコなどの木々や果樹が好きで、ブルーベリー、アケビ、オレンジ、レモン、アーモンド等々、三〇本以上が我が家の庭に植わっています。うまく育てて実をつける。「さあ、来年からどんどん生りだすから、収穫大変だよ」と、嬉しそうでした。

子供や孫が大勢でワイワイしているのが楽

しいようで、家族が集合した時でも中心になろうとはせず、皆の楽しそうな様子を端っこで静かに微笑んでいるような人でした。

お茶目な面も多々ありました。電気屋さんで店員の方に外国人と間違えられ英語で話しかけられ、調子にのった父は英語で対応したそうですが、いざ会計となったときに「外国の方がお買いものされるときには、本人と日本人の知り合いの方の名前が必要ですよ」と言われたそうです。どうしようかと思った父は、自分の名前の欄に「モハメド・アリ」、日本人の欄に福元さんのお名前を書いたとか。それを家族に話し「お父さん、なんしょつとね」と妹に言われ悪戯っぽく笑ったり。

父は現地での危険な話はあまりしませんでした。辛いことや不安や恐怖もあったと思います。それを家族にあまり話さなかったのは父の思いやりだったと思います。私は父と離れて暮らしていても、寂しいとか、ほったらかしにされていると感じたことは一度もありませんでした。それは家族を大切に思う父の気持ちを感じていたからだと思います。

人が生活していく上で不可欠な水、食べ物、住まいに困らない世の中、素朴で思いやりのある父は、それこそが人々の真の幸せと信じ、目指していたのだと思います。

今回アフガニスタンまで父を迎えにいき

ました。大統領ご夫妻、政府要人の方々からの直接のご甲意、父がみんなに愛されていたと繰り返しておっしゃってくださいるアフガニスタン大使、アフガニスタンのカーム航空が飛行機の尾翼に父の肖像画を描いてくださいたり、ろうそくを灯して追悼してくださいる大勢のアフガニスタンの皆様、カブール国際空港での追悼式典に駆けつけてくださいったナンガラハル州の長老の方々。みなさんがこんなに父のことを慕っていて下さったのだと、身にしみました。それは父が支援を続けてきたことをアフガニスタン

国民の皆様が評価して下さい、真心を受け入れてくださいった証だと思えます。父は現地代表ではありませんが、決してひとり成し得たことではありません。一緒に働いてくださいる現地PMSの皆様、ベシヤワール会スタッフ、会員の皆様、支援し賛同してくださいる全ての方の業績だと思います。父もまた多くの方に支えられてきたのだなど感じます。それはとても幸せなことだと思います。

これからも皆様の思いや支援が継続していくことを願ってやみません。

中村先生の哲学と精神を引き継いでいきます

PMS院長補佐 ジアウルラフマン

PMSの全スタッフを代表しまして、中村先生のご家族、ベシヤワール会の皆さま、そして日本の友人の皆さますべてに心よりお悔みを申し上げます。

私たちPMSスタッフ一同は、中村先生が十二月四日にジャララバードで悲運にも凶弾に倒れたことに大変な衝撃を受け、悲しみにくれています。ご家族にとって大

切な夫であり、父親であり、また私たちにあって友人であり、仲間であり、そして何よりも偉大な師であった方を失いました。多くのアフガン人が先生の死を悼んでいます。

私は中村先生と共に二四年間、医療、井戸掘り、水利事業と様々な分野で先生の力強い指導の下で働いてきました。先生と初めて会ったのは一九九六年六月、JAMS



カシコート・サルバンド村にて堰・用水路事業開始宣言をする中村医師とジア医師 (2012年2月7日)

(Japan-Afghan Medical Services) のことでした。JAMSは、アフガン難民のためにパキスタンのベシヤワールに発足した医療組織でした。中村先生の「人の命にパキスタン人もアフガン人も違いはない」というお考えに引き付けられ、私はそこで医師として働くことを決意したのです。

数年後に、私たちはパキスタンとアフガニスタンの国境地帯の僻地に診療活動を拡大しました。山奥の小さな村々にもクリニッ

クを開設しました。そのような村に行くには、時には馬の背で揺られながら三日間かかることもありました。先生の方針は、「ほかの人の行かないところに我々は行く。ほかの人がしないことを我々はする」というものでした。

二〇〇〇年に、アフガニスタンが大干ばつに襲われた時、水がないために人々は病氣や飢餓に苦しみました。先生はその時、「医療では、飢え死にする人は救えない」という思いに至ったのです。それで、井戸掘り、カレーズの修復、用水路建設などの水利事業に次々と乗り出していったのです。

それらの事業のために、中村先生は医師でありながら独学で水利工学を勉強され、その技術を私達にも教えて下さったのです。

しかし、先生が教えて下さったのは、それだけではありません。

中村先生は医師でありエンジニアでありましたが、それ以上に哲学者でありました。先生の哲学、精神を学んだ生徒はアフガニスタンにも日本にも数多くいます。両国にいたる先生の生徒たちは、先生の精神を通して強いきずなで結ばれています。ですから、私たち中村学校の生徒たちが団結して、アフガニスタンにおける中村先生の事業を引き継いでゆくことを、私は心より願っています。

先生の肉体は失われましたが、その精神は永遠に生きています。

先生の高潔な御霊が安らかに眠られますように。

アフガン人はみんな泣いています

— 中村哲医師告別式での弔辞 —

駐日アフガニスタン大使 バシール・モハバット

中村先生はアフガニスタンで長年にわたり、医療支援をはじめ、農業支援、そして灌漑事業を通し、沙漠だった土地を緑豊かな土地へ変えてくださいました。

中村先生は「一〇〇の診療所より一本の用水路を」と訴え、干ばつの悪化により、水不足・栄養失調・感染症に苦しむアフガニスタンの人々の生活を変えるため、その生

涯をささげてくださいました。自ら現地の人々と共に生活をされた中村先生だからこそ、現状を変えるためには、水環境を整えることが第一だという発想に至ったのだと思います。一六〇〇本以上の井戸を掘ったことにより、きれいな飲み水、そして農地に水が行き渡り、一〇〇万人以上もの人々の生活が支えられました。

現地では中村先生は「カカムラッド(ムラッドおじさん)」と呼ばれ、子どもから大人まで多くの人々に慕われていました。日本人であり、アフガン人でもあるカカムラッドは、私たちのヒーローです。中村先生を救えなかったことを本当に申し訳なく思い、悔しさと悲しみで胸がいっぱいです。アフガニスタンの人々のために全力を尽くしてくださいました先生の復興支援への献身と努力は、言葉で言い尽くすことができません。

中村先生の名は英雄としてアフガニスタンの地に永遠に刻まれ、そして人々の心にいつまでも残ります。

中村先生とは個人的に長い付き合いがありました。小柄ながら、壮大な心と実行力の双方を兼ね備える、中村先生のエネルギーに私自身大きな力を頂いておりました。彼は私のヒーローであり、エンジェルです。私の心から中村先生が消えることはありません。とても尊敬していました。素晴らしい人間として愛していました。どう

か安らかに眠ってください。

理由を問わず、テロ行為は許されるものではない。現在、事件に関与したとして数名の男を逮捕しています。カブールから犯罪対策の専門チームも派遣され、早急な犯人逮捕に向け、尽力しています。

最後となりますが、中村先生の多くの素晴らしい功績に対し、アフガニスタン国民、政府を代表して、心から感謝申し上げます。

アシユラフガニ大統領の追悼の言葉

— 国営紙「カブールタイムズ」より —

(要約)

この上なく悲しいことに、アフガニスタンの敵は、恐怖と犯罪の冷酷な行為によって、中村医師と彼の同僚の命を奪いました。そのような恐怖、野蛮さ、残虐行為をもつてしても、アフガニスタンの進歩と繁栄のために働くアフガニスタン人とその国際的パートナーの決意を決して揺るがすことはできません。

中村医師は、アフガニスタンにおける長年の奉仕によってアフガニスタン東部の人々

とともに、ご家族と日本国民の皆様、そして政府に対し、謹んでお悔やみ申し上げます。アフガン人はみんな全員泣いています。悲しんでいます。

先生は、永遠にアフガニスタンの偉大な友人であり、英雄です。

中村先生のご功績を偲んで、心からご冥福をお祈りいたします。

の生活を変えた良心的で勤勉なお方でした。中村医師を失ったことは壊滅的な悲劇であり、アフガニスタン国民全体が彼の逝去を悼んでいます。

中村医師がアフガニスタンの遠隔地の人々に医療を提供することから援助を開始し、水管理、農業、灌漑システムの設計と運用の分野で効果的なプロジェクトを達成したことは称賛すべきことです。彼のアフガニスタンとその人々に対する深い理解と貧しい人々への思いやりが、人類愛の象徴としてアフガニスタン人の間で知られるようになる

りました。私は彼と二日間を過ごし、彼が構想したプロジェクトについて話し合いました。彼に最も権威のある国家勲章を授与し、彼にアフガニスタンの名誉市民証を与えたことを光栄に思っています。

アフガニスタンの人々は彼の献身の記憶を永遠に忘れてはなりません。中村医師はアフガニスタンの歴史において特筆すべき人物であり、彼のご家族はアフガニスタンの人々の心の中で特別な位置を占めています。水利事業に関する中村医師の計画とアイデアが効果的に実行されるであろうことを強調したいと思います。

（「カブール・タイムズ」二〇一九年十二月八日付のNSページに掲載された談話をまとめたものです）



アフガニスタンの国営新聞「カブール・タイムズ」(PDF版)に掲載された中村哲医師の追悼記事

信じて生きる山の民

〈中村哲医師絶筆〉

—アフガニスタンは何を啓示するのか

PMS（平和医療団・日本）総院長／ペシャワール会現地代表

中村 哲

中村医師は二〇〇九年より年に四回、西日本新聞に「アフガンの地で 中村医師からの報告」と題した文章を寄稿してまいりました。絶筆となった十二月二日朝刊掲載分をここに転載します。

◆「緑の大地計画」は最終段階へ

我々の「緑の大地計画」はアフガニスタン東部の中心地・ジャララバード北部農村を潤し、二〇二〇年、その最終段階に入る。大部分がヒンズークシュ山脈を源流とするクナルル河流域で、村落は大小の険峻な峡谷に散在する。辺鄙で孤立した村も少なくない。

比較的大きな半平野部は人口が多く、公的事業も行われるが、小さな村はしばしば

関心をひかず、昔と変わらぬ生活を送っていることが少なくない。我々の灌漑計画もそうで、「経済効果」を考えて後回しにしてきた村もある。こうした村は旧来の文化風習を堅持する傾向が強く、過激な宗教主義の温床ともなる。当然、治安当局が警戒し、外国人はもちろん、政府関係者でさえも恐れて近寄らない。

◆忠誠集める英雄

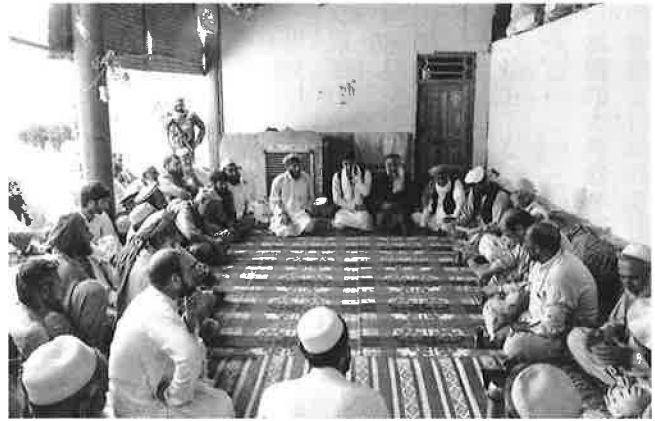
ゴレークはそうした村の一つで、人口約五千人、耕地面積は二〇〇ヘクタールに満たない。これまで、日本の非政府組織（NGO）である日本国際ボランティアセンターが診療所を運営したことがあるだけで、まともな事業は行われたことがなかった。PMS（平和医療団・日本）としては、計画

の完成に当たり、このような例を拾い上げ、計画地域全体に恩恵を行き渡らせる方針を立てている。

同村はジャララバード市内から半日、クナルル河対岸のダラエヌールから筏で渡るか、我々が三年前から工事中の村から遡行する。周辺と交流の少ない村で、地域では特異な存在だ。圧倒的多数のパシュトゥン民族の中であって、唯一パシャイ族の一支族で構成され、家父長的な封建秩序の下にある。



ゴレーク村の指導者カカ・マリク・ジャンダール氏（左から2人目）らと談笑する中村医師（右から2人目）。右端はジア院長補佐（2019年10月16日）



ゴレーク村の予備調査のための交渉。中村医師ら(右列)が村人にクナール川でのPMSの活動の経緯と共に、洪水被害を減らし安定した灌漑ができるようにするための調査であることを説明した(2019年10月16日)

パシャイはヌーリストン族と並ぶ東部の山岳民族で、同村の指導者はカカ・マリク・ジャンダール。伝説的な英雄で、村民は彼への忠誠で結束が成り立っている。他部族にも聞こえ、同村には手を出さない。

十月中旬、我々は予備調査を兼ねて、初の訪問を行った。クナール河をはさんで対岸にPMSが作った堰(せき)があり、年々の河道変化で取水困難に陥っていた。ゴレーク側からも工事を行わないと回復の見通しが立たない。ゴレークの方でも取水口が働かず、

度重なる鉄砲水にも脅かされ、耕地は荒れ放題である。この際、一挙に工事を進め、両岸の問題を解決しようとした。

「諸君の誠実を信じます」

最初に通されたのは村のゲストハウスで、各家長約二〇〇名が集まって我々を歓待した。他で見かける山の集落とさして変わらないが、貧困にもかかわらず、こぎつぱりして、惨めな様子は少しも感ぜられなかった。

ジャンダールは年齢八〇歳、村を代表して応対した。彼と対面するのは初めてで、厳めしい偉丈夫を想像していたが、意外に小柄で人懐っこく、温厚な紳士だ。威あつて猛からず、周囲の者を目配せ一つで動かす。

PMSの仕事はよく知られていた。同村上下流は、既に計画完了間際で、ここだけが残されていたからである。

「水や収穫のことで、困ったことはありませんか」

「専門家の諸君にお任せします。諸君の誠実を信じます。お迎えできたことだけで、村はうれしいのです」

「終末的世相の中」

こんな言葉はめったに聞けない。彼らは

神と人を信じることでしか、この厳しい世界を生きられないのだ。かつて一般的であった倫理観の神髄を懐かしく聞き、対照的な都市部の民心の変化を思い浮かべていた。——約十八年前(〇一年)の軍事介入とその後、の近代化は、結末が明らかになり始めている。アフガン人の中にさえ、農村部の後進性を笑い、忠誠だの信義だのは時代遅れとする風潮が台頭している。

近代化と民主化はしばしば同義である。

巨大都市カブールでは、上流層の間で東京やロンドンとさして変わらぬファッションが流行する。見たこともない交通ラッシュ、霞(かすみ)のように街路を覆う排ガス。人権は叫ばれても、街路にうずくまる行き倒れや流民たちへの温かい視線は薄れた。泡立つカブール河の汚濁はもはや河とは言えず、両岸はプラスチックごみが堆積する。

国土をかえりみぬ無責任な主張、華やかな消費生活への憧れ、終わりのない内戦、襲いかかる温暖化による干ばつ——終末的な世相の中で、アフガニスタンは何を啓示するのか。

見捨てられた小世界で心温まる絆を見いだす意味を問い、近代化のさらに彼方(かた)を見つめる。

中村哲君を迎えに

——ご遺族に同行しカブールへ

ペシヤワール会副会長 城尾邦隆

十二月四日、中村哲君をめぐる緊急ニュースに呆然としていたら、PMS支援室長の藤田千代子さんから「ご遺体のお迎えに行かれるご家族と一緒に、現地に行ってくださいますか」と電話がありました。村上優会長は、飛び交う情報の中で動揺が広がる事務局をまとめるために残るので、同級生の縁で長く理事を務め副会長に指名されていた私が、会を代表して初めて現地に行くことになりました。

この事態をわが事としてご心配下さっている会員・支援者の皆さんに、現地で見聞きした衝撃、悲しみ、困惑、あふれる中村君への感謝を共有したく、経過をありのままお伝えします。

五日午後、ペシヤワール会事務局で緊急連絡会。村上会長から「ペシヤワール会は現地PMSの活動を引き続き支援するとは是非伝えるように」と指示をうけました。藤田さんと私は、ご家族と福岡空港で合流。羽

田空港では、現地で六年間活動をした元ワーカーの近藤真一君が合流し、さらにその後の全行程に外務省領事局課長補佐の小池洋氏が同行され、一行は計六名でした。カブール到着は翌六日十四時半でした。

出迎える日本大使館職員から「これから約十五分は特に危険な地域を移動するので注意が必要です」と告げられ、ガード付の特別車に分乗。車列は幾重もの検問をこえて宿舎となった在アフガン日本大使館に十五時過ぎに到着。鈴鹿光次大使の迎えをうけました。

これ以降は、現地大使館がアフガン政府の関係部署と調整し作成された日程表に従いました。ただちに中村君の遺体が安置された市内の国軍病院へ。「哲ちゃん」との辛い面会でした。

夕方十七時、大統領府でガニ大統領からお悔やみを受けました。曰く、「中村哲氏は最も尊敬し親しくした友人だった。氏から事業内容の詳しい説明をうけて話し合った二日間は、私にとって美しい思い出である。突然の悲報に、みな深く傷つき悲しんでいる」。

続いてルーラ大統領夫人が「周りの女性たちも全て、尊敬する中村氏を失い、とても悲しんでいる」と語りかけられました。日本大使の謝辞の後、長女秋子さんが大

統領府での異例の会見にお礼を述べ「私たち家族はとても悲しいが、父親が貴国でこれほど敬意を払われ感謝されていることを知り、救われました。同時に被害にあった運転手やガードの五名と残された家族も同じでしょう。彼女たちにも十分の配慮と保護をお願いします」と結ばれました。この秋子さんの言葉で一気に近しい場となり、大統領は「奥さまとお嬢さんは、私たちの家族だ」と言葉を加えられました。

宿舎の大使館に戻り、私は、去る十一月に北九州市で行われたJICA(国際協力機構)主催によるアフガン研修生への講演と指導、事業拡大への準備協議の後、中村君を小倉駅まで車で送った時のことを話しました。「緊張して慎重に運転する私の隣で哲ちゃんは携帯をとりだし、おかあさん、今から帰るけど家に着くのは遅いので食事はすませておいて」と、これまで聞いたことのない優しい声でした」

ご家族は「日本にいるときはこまめに電話してきましたよ」。また、現地のガンベリ記念公園の花壇の話をする中で、「お父さんは以前バラを育てており、何本か残っていますが、今は柿や栗など実のなる木の剪定、草とり。アフガンから帰ると休む間もなく、庭に出ていました」、「医療支援を始めたこ

ろは、家族四人で現地食や住まいになれるのが大変でした」と話されました。

大使館の三木医務官から、襲撃受傷後の治療と死亡に至った経過を、資料をもとに夜遅くまで詳細に説明してもらいました。さらに遺体の搬送に伴う様々な書類作成には、大使以下多くの職員の尽力があつたようです。

翌七日朝、ジヤ先生やディダール技師とようやく合流。憔悴し苦渋にみちた表情に、指導者であり友人だつた中村君を失つた悲しみと、中村君を護れなかつた後悔と苦しみが満ちていましたが、藤田さんや近藤君との再会に幾分和らいだようです。

十三時ごろにはアブドラ行政長官（首相相当）が大使館に來られ、ご遺族に丁寧な弔問。この機会に、ペシャワール会を代表して、「中村君は二〇〇三〇年後には現地の方たちが自力で水路を維持し拡張することを目標として、近年、PMS現地スタッフを日本に度々招いて交流を深めてきた。今後も灌漑事業を続けて彼の希望と夢の実現に役立ちたい」と伝えました。長官は、「全国各地の灌漑事業の拡大を支援することを約束する」と発言されました。

早々に帰国の準備に入り、それぞれ車に分乗して空港へ。カブール空港で待機中に、現地ナンガラハル州のシャーマフムッド・

ミヤヘイル知事の弔問を受けた際にも同様のことを伝えました。彼の顔には、中村君への深い敬意と謝意、恩人を護れなかつた悔恨がありました。

十六時の搭乗前、最高の敬意を払い準備された葬送の儀が行われました。機体の横に整列する儀仗兵と並んで待っていると、ヘリコプターを降りたガニ大統領自身が中村君の棺を肩にのせて運びました。引き続きガニ大統領から、アフガニスタン国民を代表して深い感謝と哀悼、送別の言葉を聞きました。

式が終わりそれぞれ機体に向かおうとするとき、二〇名ほどの地元の方々が小走りで近づいてきました。中に、工事の竣工式などの写真にあつた地元各地区の長老方が十名ほどおられて、必死の表情でご家族にお礼を言おうとします。中村君がどれほどの貢献をして、皆さんに慕われていたかを間近にし、最も感銘をうけた瞬間でした。

機内では、四〇代前半の方が中央銀行副総裁であると名乗られ、「十月のドバイ・カブール便で隣合わせた中村氏と話した楽しい思い出がある」と言いながら、二人並んだ楽しいなスマホの写真を見せてくれました。ドバイ到着後の入国手続き中には紳士が近づいてきて挨拶。カブール大学学長の

ハミドウラ・ファルキ氏でした。アフガンすべての人々に、中村君への敬意と悲しみが広がっていました。

帰路は中村君と長く友情を温めてきた駐日大使バシル・モハバット氏が成田空港まで同行され、後日の葬儀への参列も希望されました。ドバイでの乗り継ぎ時にホテルで休養した際はアラブ首長国連邦駐在の中島明彦大使が弔意を表されました。成田空港では外務副大臣の鈴木馨祐氏による出迎えと献花がありました。

翌朝、日本航空便でいよいよ福岡空港へ。ご遺体を移す前、ヘルメットをとり一礼する作業員の姿があつたようです。

九日午前十時、福岡に戻り緊張が和らぐなかで、同行してきた外務省の小池さんが「これまでに多くの方と接してきましたが、これほど現地の人々に愛され感謝される日本人は初めてでした」と語られました。

福岡県警を初め、外務省・各大使館、航空各社などすべての関係者が、ご遺族のためにすべて円滑に進むよう尽力してくださいましたことに感謝します。

以上、私たち一行が経験したことはすべて、中村君への敬意と感謝から、心をこめて行われたことをお伝えして報告とします。

中村哲医師逝去の悲報をうけてー経過報告ー

ペシャワール会広報担当理事 福元満治

十二月四日(水) 日本時間十三時前、

藤田PMS支援室長より電話があり、PMS院長補佐のジア医師から中村医師が何ものかに銃撃され、ジャラバードの病院に移送されたという。いつものようにジャラバードの宿舎を出て作業現場に向かう途中で、現地時間午前八時過ぎのことである。腹部を撃たれたが命に別状はないとのことだった。同乗のドライバーのザイヌッラーさんと護衛の四人は亡くなったという。中村医師の車には、ザイヌッラーさんの他にガードがひとり乗り、後続車には、PMS職員のドライバーのムハマド・ヤシンの他に三人のガードが乗っていた。

中村医師銃撃のことは、すぐに外電で伝わり、事務局には報道陣が集まり始めた。私は、分室から事務局に移動し、古川事務局長と共に十四時半から記者会見をする旨を伝える。さらに十三時五五分、傷は右胸で意識はあったと連絡。集中治療室で手術中だが、PMSの職員は接触出来ないという。中村家に電話、「大変なことが起こりましたが、先生の命には別状ありません」

と奥様に伝えた。

十四時半の記者会見のあと、十六時三〇分からの記者会見を準備していると、十六時頃中村医師が病院からジャラバード空港に移送中に亡くなったとの知らせが入った。果然としつつ、奥様に電話でお知らせした。奥様は「分かりました。あとのことがあると思うので、また連絡を下さい」と冷静に答えられた。その後十六時三〇分からの記者会見に臨み、中村医師の死去を伝えると共に、事業の「継続」を表明する。

夜になり、外務省の邦人テロ対策室と連絡を取ると、ご遺体を迎えに行く意向があるかを問われたので、中村家に連絡をすると、奥様とご長女が迎えに行きたいとのこと。在アフガンの日本大使館の領事が迅速に動いてくださった。また、ご家族への同行者三名についても依頼する。同時に、現地からPMSのジア医師とディダール技師がご遺体と日本に同行できるよう併せてお願いする(ご遺体は、カブールへ移送された)。外務省・大使館共にご協力くださり、関係機関に手配して頂く。

その際、海外旅行傷害保険に加入していることと、搬送費用等を会が負担する旨をお伝えした。

十二月五日(木) 終日、事務局で会議と打合せ、現地への渡航準備と葬儀の手配に入る。十七時記者会見、ご家族がカブールへ向かうことを伝える。深夜の便で、家族と同行者羽田を出発、ドバイ経由でカブールに向かう。

十二月六日(金) 現地時間十四時三〇分、家族一行カブール着。日本大使館の方が出迎えてくださる。中村医師のご遺体と対面。その間、日本側では、事務局長と担当者が、葬儀社と福岡県警と協議しつつ、葬儀の準備に奔走する。

十二月七日(土) アフガニスタン・イスラム共和国ガニ大統領による葬送の儀。棺は大統領自らも肩にされた。現地時間十六時〇五分カブール発、ジア医師とディダール技師同行。

十二月八日(日) 日本時間十七時二〇分成田空港着。

十二月九日(月) 羽田発福岡空港十時到着。空港では、在九州アフガン人数十名の人びとを含め大勢が出迎える。十一時から空港待合室にて、村上優ペシャワール会会長が記者会見を行う。報道機関に対して、ご家族や中村家への接触や取材の自粛を申し入れる。ご遺体は、検死のため大牟田署に向かう。十二月十日(火) 夕刻ご遺体をご自宅に帰る。ジア医師たちが弔問。

十二月十一日(水) 十三時〜十五時

まで、福岡市中央区ユウベル積善社福岡斎場にて葬儀。中村家とペシャワール会の合同葬儀、喪主中村健(長男)、葬儀委員長村上会長。弔辞は、バシル・モハバット駐日アフガニスタン特命全權大使、久保千春九州大学総長(大学同級)、西川ともゑ(高校同級)、和佐野健吾(中学同級)、藤井健児(中村医師中学生の時の教会牧師)、玉井史太郎(いとこ)。祭式は宗教にこだわらない献花方式で、中村医師の好きだったモーツァルトやバッハの曲が流された。参列者は全国から約一八〇〇人。弔意は、上皇様ご夫妻と秋篠宮様からもいただいた。中村医師の遺骨の一部は分骨され、緑に甦ったガンベリ沙漠にも埋葬されることになった。

十二月十二日(木) 十時よりジア医師、ディダール技師を交えて、事務局・理事メンバーと今後のことについて協議した。その席でPMS総院長として村上会長が就任。今後の事業の再開・継続ならびにセキュリティの確保等について協議された。その後、十六時よりその結果を受けて、村上会長が、今後の方針を述べるとともに、殉職された方々への保障やお見舞いについて記者会見を行った。

十二月十三日(金) ジア医師、ディダール技師離日、帰国の途につかれた。

中村医師と現地事業の足跡

1946 (昭21)	9月：中村哲医師、福岡県にて出生。西南学院中、福岡高、九州大学医学部に進む
1978 (昭53)	中村哲医師 福岡登高会のテリチミール遠征隊同行医師としてパキスタンに初入国
1982 (昭57)	4月：パキスタンのペシャワール・ミッション病院よりJOCS (日本キリスト教海外医療協力会) に医師の派遣要請
1983 (昭58)	4月：JOCS、中村医師の派遣決定/9月：ペシャワール会発会式
1984 (昭59)	5月：中村医師、ミッション病院に着任
1986 (昭61)	アフガン難民 (パキスタン側) への診療を本格的に開始。4月：中村医師、足底穿孔症予防用のサンダル工房を開設
1987 (昭62)	1月：中村医師とアフガン人医療チームによるハンセン病多発地帯のアフガン難民キャンプ (パキスタン側) の巡回診療を開始
1988 (昭63)	5月：旧ソ連軍アフガニスタンより撤退開始 (翌年2月撤退完了)
1989年 (平1)	1月：JAMS (日本・アフガン医療サービス) 発足、アフガニスタンにも活動範囲を広げる
1991 (平3)	1月：湾岸戦争勃発/12月：アフガニスタン・ナンガラハル州北部のダラエヌールに最初の診療所を開設。以来、アフガニスタン東部とパキスタン北西部の山岳無医地区に次々と診療所を開設
1992 (平4)	5月：アフガン難民の爆発的な帰還が始まる
1993 (平5)	ダラエヌール診療所周辺で悪性マラリアが大流行、治療薬購入の緊急募金に2,000万円以上の寄付。2万人以上の命が救われる
1994 (平6)	4月：ヌーリスタン西部地区にワマ診療所開設/10月：ペシャワール・ミッション病院の活動を終了/11月：PLS (ペシャワール・レプロシー・サービス) 病院を設立。ペシャワール市内で活動を開始
1996 (平8)	9月：タリバン政権樹立
1998 (平10)	4月：ペシャワールにパキスタン・アフガニスタン両国での活動の拠点となるPMS基地病院開設し、JAMSとPLSを統合。PMS (ペシャワール会医療サービス) を発足、医療チームは基地病院からひと月交代で山岳無医村のPMS各診療所で診療
2000 (平12)	6月：'70年代から悪化の一途を辿る干ばつがアフガニスタン全土で一挙に深刻化。多くの国民が難民化、水不足で赤痢やコレラが急増、緊急対策として水源確保事業を開始。'08年までに飲料用井戸約1,600本、灌漑用井戸13本、カレズ (伝統的な地下水路) 38カ所を再生し多くの村民の難民化を食い止める/12月：国連安保理タリバンに制裁決議
2001 (平13)	3月：カブールに5カ所の臨時診療所を設置/9月：米国同時多発テロ事件勃発。中村医師ほかPMSスタッフが外務省の勧告を受けアフガニスタンより出国、ペシャワールで活動を継続/10月：カブールで米英軍による大規模空爆が始まる中、「アフガニのいのちの基金」を設立、ジャララバード、カブールで食糧配給開始。'02年2月までに15万人に主食の小麦粉と食用油を配給/11月：カルザイ政権樹立
2002 (平14)	2月：「アフガニのいのちの基金」をもとに、アフガニスタン東部における長期的農村復興「緑の大地計画」 (= 農業・農村復興事業) 発表/6月：アフガニスタン・ジャララバードに水源確保・農業のプロジェクトを統括する「PMSジャララバード事務所」設立。この年、会員が1万名を突破
2003 (平15)	3月：マルワリード用水路の起工式。イラク戦争開始
2007 (平19)	4月：用水路第1期工事完了と第2期工事の鉄入れ式
2008 (平20)	1月：マドラサ建設着工/8月：現地活動中の日本人ワーカー・伊藤和也さんが襲撃を受け逝去
2009 (平21)	7月：ペシャワールの基地病院を地元団体に譲渡、PMSの活動拠点をアフガニスタンのジャララバードに移す/8月：用水路24.8km最終地点ガンベリ沙漠に通水。試験農場をダラエヌール渓谷からガンベリ沙漠へ移し約180ヘクタール確保、農地開拓始まる/9月：マドラサ開校 約600名の学童通学
2010 (平22)	1月：現地事業体名を「ペシャワール会医療サービス」から、「平和医療団・日本」へ変更 (略称はPMSのまま) /3月：マルワリード用水路完工式。マドラサ・モスク譲渡式/8月：アフガニスタン・パキスタンで100年に1度の大洪水/10月：既存用水路カマ第2の取水門・堰・主幹水路・沈砂池・送水門と排水門新設工事に着工。ベスード郡 (カマ郡対岸) の3,500mの護岸工事に着工 (ともにJICA-PMS共同事業。以降★印)
2011 (平23)	3月：カマ第2用水路通水/4月：モスク・マドラサに併設する寄宿舎完成・譲渡式/7月：ベスード第1取水口工事開始
2012 (平24)	4月：ベスード第1取水口及び護岸3.5kmの竣工式/9月：用水路流域の村民を束ね、第1回定例淡漠/10月：カシコート取水施設本工事開始
2013 (平25)	3月：ガンベリ試験農場にオリーブ植樹 (アフガン灌漑農業省共同事業) /6月：断続的に記録的な大洪水襲来、アフガニスタン各地で堤の決壊や溢水が起こる
2014 (平26)	4月：ガンベリ試験農場にて畜産を開始/9月：マルワリード・カシコート連続堰竣工。主幹水路2km、護岸4km完工/10月：ミラーン堰着工/12月：ガンベリ農場に記念塔完成。PMSガンベリ事務所とし、農業班・灌漑班を置き開拓事業の自立体制を本格化させる。ガンベリ沙漠のサトウキビで黒砂糖の復活生産に成功
2015 (平27)	2月：アフガン東部で季節外れの大洪水ーカブール河の水位がベスード第1取水門を30cm超える。ジャララバード市内浸水、高地で降雪と雪崩頻発/7月：在アフガニスタン日本大使、アフガニスタン中央政府の農業大臣、農村復興開発大臣、国連食糧農業機関 (FAO) 所長がガンベリ農場を視察
2016 (平28)	2月：ガンベリ沙漠開墾地 (PMS農場) 約230haの20年貸与契約締結/3月：ガンベリ主幹排水路工事開始ー対立する各村自治会の協力を獲得/7月：パキスタン政府アフガン難民強制送還の動き/9月：ミラーン堰完工、1,700haの安定灌漑を保障/10月：PMS取水方式の広域展開を目指し、人材育成のための訓練所建設を開始 (FAO-PMS連携事業、以下★印)。マルワリードII堰建設開始。ガンベリ農場にてオレンジの初収穫
2017 (平29)	3月：ナツメヤシ464本ガンベリ農場に植樹 (日本大使館共同事業) /4月：PMS現地職員がJICA-PMS共同調査 (水利及び農村、社会調査) の研修のため来日、定期的な本邦招聘始まる/11月：訓練所建設完工
2018 (平30)	1月：訓練所で授業を開始、PMS取水方式の普及計画の第1歩。アフガニスタンのガニ大統領がPMSと中村哲医師に勲章を授与/6月：土木学会技術賞授賞/7月：アフガン政府、FAO関係者、PMS職員が山田堰などを視察
2019 (令1)	3月：植樹が100万本突破/4月：養蜂事業開始/9月：アフガン政府関係者、PMS職員が来日山田堰などを視察/10月：ガニ大統領より「アフガニスタン・イスラム共和国市民証」を授与される